

「つよい」ということ

山田知子

体育の発生は、つよくなりたいたいと願った人々の努力のうちにもみることが出来ると思う。

体育の歴史は、いかになせばつよくなるかについて考えられ、試みられつづけて来たところに存在するといえよう。

それでは、どのようなことが「つよくなる」であったのだろうか。

ここでは、古来、我が国において求められて来た「つよい」について考えてみたい。

一

ころんでもいままにも泣き出しそうな幼児・押し出されそうになりながら、土俵際で必死にこらえている少年・寒い朝

も水のような水で洗顔する子供に対して、我々は「つよい・つよい」と声をかける。

「つよい・つよい」は励ましのかけ声であると共に褒美の言葉でもある。

現代一般には、丈夫で健康な体、敗けたことがない、一旦決心したことは必ずなしとげる等、いわば身心の健固なことを「つよい」と称している。

「つよくなる」ことは、いつの時代においても、又いかなる社会においても望ましいことだと考えられて来た。

我々が子供達に、「つよい・つよい」と声をかけるのも、「つよくなる」ことは望ましいことであり、泣かない、こらえる、がまんすることは、「つよくなる」ために子供の頃に経験しておかなければならないことだと考えら

れて来たからであらう。

我が国においても古来、立場は人によって各々に異つていても、「つよくなる」ことは、望ましいこととされて来たし、各々に「つよくなる」方法を求めて来た。

「つよい」人の子孫であることを誇り、「つよい」人の用いた道具や、伝えられるかぎりの言動を真似ようとすることや、「つよい」人を奉る社に祈願し、護符を授けてもらうこと等は、その現われであらう。

「つよくなる」ための方法は、先祖の用いた道具を保管したり、家系図のうえにつよい先祖を求め、その血縁にあることを名譽とするような、消極的なものばかりではない。

各々の立場において、現実の自己の「つよさ」を試そうとし、相手をもとめて競い合うといった積極的なものも多くあらわれている。

力くらべ、技くらべ等がそれであらう。勝ったものは、更につよい相手に挑み、負けたものは、挽回を計って精進した。なかには父―子―孫と幾世代もにわたって努力されつづけていったものさえある。

人々が同じ生きるなら「つよく」と望んだその「つよく」とはいったいどういふことなのであらうか。

二

「つよし」^①という言葉は、大言海^②によれば【突能^{つぎよ}しの略・弱しに対す】とある。「つよし」は「つき・よし」という二つの言葉が省略されたもので本来の意味はこの二つの言葉の意味にあり、しかも「いや・おれ」の省略語「弱し」の意味と対照的に用いられる言葉であるという。

「つき・よし」の「つく」は、槍をつく、鐘をつく、杵をつく、敵陣をつく、息をつく等のように用いられることから自己以外のものにむかって発せられる行為を指す語である。そして「つく」という行為の特徴は「つく」の用例のうちにくつかを、みることが出来る。

第一は、槍をつく、鐘をつく、杵をつくという場合の「つく」は、棒状のものの先端あるいは、末端を押しあてるところである。

あてるといふ言葉には意図的、計画的なものが含まれている。あたるかあたらなにか解らないがとにかくあててみようと思ひ、なるべくあたるようにするというのがあてである。従つて「つく」といふ行為には、少くとも結果が予想されているはずであり、その実現のために思考をめぐらせるという精神の働きの含まれていると考えられる。

第二は、敵陣をつく、息をつくという場合の「つく」には、それまで塞止められていた水が、一度に流れ出すときのように、何ものが内から外に一挙に激しく放出されていく状況が察せられる。「つく」という行為には、一度表出されれば、自らが自らの意志をもってしてもとどめることの出来ないほどの恐ろしい勢力が含まれていると考えられる。

第三には、「つく」という行為には、何にあてるか、どこに進むかといった目標があることである。

「よし」という言葉は、一般にものごとを肯定したり、承認したりするときに使用する。

ものやことを肯定したり、承認したりするのは、そのものやことが、そこに存在していることが適切であると考えられるからである。

具体的な時や場において、ものやことがどのように存在すれば最も適切であると考えるかについては、個人々人によって異っている。従って一口に「よし」といっても何に對して、どの程度に肯定されているかは、常に一樣ではない。極端な場合には、ある人は「よし」といい、他の人は「わるし」という場合もあるわけである。丈夫な体、明るい性格、親切、正義等は、人々がよりよい生活を営むうえ

に「よし」とされて来たし、誰もがそう考えている。そして実際のな行為のうちには、これらが現らわれていることが客観的に認められるとき、その行為は、客観的に「よし」行為となり、社会内で奨励されるようになるのである。

「つよし」という言葉は、撓まず・挫けず・猛し・こわし・烈し・荒しといったものやことの状態を指す形容詞として用いられるが「つよし」の本来の意味を「つき・よし」という言葉に求めるならば、撓まず・猛し・荒し等は、単なる現象を指しているのではなく、意図的・計画的なるものが行為に現われたことを意味していると考えられる。例えば槍をつくとき、しっかりと目標を定め、充分に相手の隙をうかがい、全身の力を槍先に集めて相手に、まあてようという一瞬に、いかなる些細なことであっても、考えごとをしたり、想像したりすることは許されない。

思考は行為をとどめ、行為は思考をとどめる。考えごとや想像することによって、槍先に集められた全身の力は、身体内部に引き戻されてしまい「つく」という行為は挫折してしまふからである。それは、逆に相手に充分な隙を与えることになるであらう。

傍若無人の武将が、究極の場で命を惜んだために、敵に手傷を負わされ、腰抜け士と笑われながら一生を終らなけ

ればならなかったといった例がそれであろう。

行為が挫折してしまふことは「よわし」である。とどまりのない行為によって意図を実現するためには、身心を何らこだわるもののない状態におこななければならぬ。充分な身構え、心構えのうえに発せられた行為にみられる撓まず、猛し、荒しが「つよし」なのである。

三

「つよく」なりたいたいと願うのは、自己を「よわし」と思うからである。自己の「よわし」は、自己を他と比べることによってのみ知ることが出来る。「よわし」自己に対して「つよし」は他であり、客体である。「つよく」なりたいたいというのは、「つよし」客体に自己がなることを願っていることなのである。「つよく」なるための方法は、古来「つよし」客体のうちに求められて来た。それが何故「つよし」のかを考えることによって、その要因を自己のものになそうとして来たのである。

第一に「つよい」ものをもっているということである。もの、という言葉は、大言海によれば、「凡そ形ありて世に成り立ち、五官に触れて其存在を知らるべきもの及び、形なくとも吾等の心にて考え得らるべきものを称する語」

とある。すなわち我々が見る、聞く、触れる、考える、思うことが出来るもの、すべてがものである。そして、ものは常に自己の外にあり、指で指すことやそれについて説明することの出来る客体として存在しているかあるいは存在させている。

ものをもつというのは、この客体として存在するもの、を所有することである。

人類がつよいものを求めたのは、おそらくは人類が自然の法則^①に順ずることを拒みはじめたときからであろう。このことについて「人間の歴史」の著者M・イリンは次のように説明する。

地球上に住むすべての生きものは、給養の鎖につながれて生存し、子孫を繁殖させている。リスはモミの木やキノコ等が生えている森から出ては生きていくことが出来ないし、テンは、リスやねずみ等の棲む所から離れるわけにはいかない。そして冬の生きものの生態は、彼らの栖のあるところに最もよく適応出来るようになっていて、世代の交替ごとにますます特徴づけられていっている。象は熱帯地方、白熊は寒帯地方にしか棲むことが出来ないように変化して来た。従って地球上に異変が起り、食糧がなくなりはじめたら、そこに棲むものはたちまち全滅してしまうで

あろう。もし人類が、食糧がなくなる以前に給養の鎖をたち切つてどこにでも住めるようになっていなくなつたら、巨大な体と鋭い武器を備えていた古代の動物達が、寒波や飢えのために一夜にして全滅したと同じ運命をたどらなければならなかつたであらう。

古代の動物は、自然の法則に順じて生活し、そして消え去つたけれど、人類は自然の法則に順じることが拒んだために全滅の運命はまぬがれたとはいへ、常に自然のもの、とたたかわなければならなかつた。自らが給養の鎖につながれていることさえも気付いていなくなつた時代には想像も出来なかつたさまざまな恐ろしいものを知つたのである。

人類が地球上に生き残ることが出来たのは、自己と他のものを区別して考えることが出来るようになったからである。他のものは、自己のものではなく自然のものなのである。初期の人類はおそらく自然のもの、のうちにも「つよい」もの「よわい」ものがあることを発見したにちがいない。「つよい」ものは非常な勢で自己に迫ってくるものであり、自己を戦慄させる恐ろしいものであつたと考えられる。

恐ろしいものから遠ざかるという消極的な生き方を、恐ろしいものに手向い、討ちとりあるいは自分達の思うまま

に働かせるといった積極的な生き方に変化させていったのは、自己の体をものとして使用することを発見したからである。歩行にしか使えなかつた両手をさまざまな働きをする道具とし、更に石や棒切れといった自然物をもつことによって、道具の役割を拡大させていったのである。自然の「つよい」ものと対向しようとしたのである。槍や剣等の武器は、動物の牙や角にヒントを得て作られ改良されたものとみることが出来る。

自然の「つよい」ものは具体的な物体ばかりではない。水や火や風は気まぐれに人類に襲いかかつて来るものである。

これらは姿の見えない超人的な力をもつものが支配すると考えられた。このような「つよい」ものには彼らの気嫌をとることに人類的味方として働いてくれるように頼んでいる。

記紀^⑥にみられる伊邪那岐命、伊邪那美命が天つ神の命令によつて下界に降り、多くの鳥やさまざまな自然のものをつくり、これを治める神々をつくる、国と神の生成の過程は、人類が、自然のものを次々とものとして発見し所有していく過程ではなかつたかと考えられる。伊邪那美の命

は、自らつくり出した火の神によって黄泉の国に去ってしまふ。

火は、自然のものうちでも人類にとっては最も恐ろしいものであったにちがいない。

ギリシヤ神話にも天界から火を盗み出して人類に与えたプロメテウスが、ゼウスの神の怒りにふれコーカサスの山に鎖でつながれ、禿鷹の餌食にされるという責苦を負わされるようになったという話がある。

人類が火を所有することに傾けられた情熱と努力、工夫は格別であつたと思う。それ故に人類はその生存を一段と確実なものにした、すなわち「つよく」なつたと考えることが出来る。

「つよい」ものをもつということは、「つよい」と感じた自然のものを人類が所有することである。それは自然物をそのまま利用するというにとどまらず、加工し、改良し、更に自らの力で創り出すことである。

人類は、多くのものを所有することが出来るようになった。「つよい」ものをもつことも出来るようになったのである。しかしものを所有するということは、いまだものは客体として存在していることである。「つよい」ものをもつことは「つよい」ものになる過程ではあつても、いまだ

「つよい」ものになつたことではない。

ものになるというのは、みずからそのものに変身することを意味する。

この変身の過程に求められたのは技であらう。第二に考えられる「つよし」の要因は、すぐれた技である。

自然物をより便利なものに加工し、改良していくためには、けづる、みがく等といった作業が必要であらうし、道具を毀したり、紛失したりしないように使用していくためには、道具の扱い方について工夫したり、学んだりする必要もあつたであらう。怒る神々を慰め、よろこばせることや、感謝の気持を現わす方法にも工夫は必要であつたにちがいない。

よい為し方、すぐれたやり方は、又人類の共通のものとして存在するようになり、人々は、これらを教えられ、学んだのである。

技術は、このような誰が試みても同じように為すことが出来る客体として存在しているものである。

技術が自己のものになるということは、自己と技術を分離することの出来ない状態にしてしまうことであり、すなわち主体化してしまうことである。

劍術でいえば、刀の持ち方、振り上げ方、刃のあて方等

は、誰がやっても同じようにすることが出来る。しかし、電光石火のごとくに人を切ることに、あるいは、刀の束に手をかけるだけで敵を降参させる等ということは、教えることも出来ないければ、真似ることも出来るものではない。それはもはや、人が刃物を持って、人を切るのではなく、全身が刃物になっている状態、人即刃物、刃物即人だからである。

技術が主体化してしまつたものが技である、技がすぐれているということは、刃物を持たずとも、全身が刃物であれば、他は恐ろしいと思うであろう状態を指している。

芸事にたづさわつた人々が芸に生きるとき、自己が芸そのものになるばかりでなく、有限の生命を芸の世界において無限に活かしつつづけるという意味を含めていたのである。

技術が技となる過程は、おおよそ次のように考えられて来たと思う。^⑧

それは、客観的なものを学ぶことから始められる。学ぶが真似るであるといわれるように、具体的な姿、形を真似る、すなわち、まったく同じものが二つ出来るようになることである、いつ、いかなるときにも同じに出来るようになることである。いかえれば慣れてしまうことである。

姿・形の上では、客体と自己との距離はなくなつたとはいえ、具体的な場面において、客体が發揮する性質と同じようなものが現われるようになるためには、実際のな場面における経験を積まなければならない。

武將が初陣の若者には、易いと予想される戦場を選び、参加させ、手柄を賞めながら、次第に困難な戦いの場に出陣させている。実戦の場を与えるだけで、特別な練習の場を与えなかったのは、ものになつたように見えて実際には使えないものにならない武士に育ててはならなかつたからである。若い武士達にとっては、実戦の場は、どの程度、本当に自己がものになり得たかを、みづから体験的に測り得る機会でもあつた。

実際のな場においても、ものを役に立てるためには、ものが活きる場を知らなければならぬ。技を活かすことが出来なければ自己を活かすことにはならない。

保元物語に現われる鎮西八郎為朝は、すぐれた武將であつらしいが、彼の技が、十分に活用出来る場を与えられたとは考えられない。彼のようにすぐれた技をもつものが、一族をかばいながら落ちていくのに同情を寄せたのは保元物語の作者ばかりではない。為朝は、後の世の人々によつて、各地でさまざまな姿となつて活かされて来ている。^⑨

「つよい」ものになるためには、みづからが又「つよ

い」ものでなければならぬ。

第三に考えられる「つよし」の要因は、身心がすぐれて健康であるということであろう。

健康というのは、すすりとした状態に心安らかでいられることである。

すすりとした状態というのは、ものが質量共に拡大し、変化していく過程に防げとなるような障害が内外共にない場合を指す。

病氣や身体内部における機能の障害、有機的生命体のもつ本性的な欲望の圧制、極端な食糧不足等は、人間の身心の変化発達を防げるものであり、人間は、ものになることに身心を集中させる以前に、まずこれらの障害を取り除くことにかからなければならぬ。

心安らかにいられるということは、常に「つよし」ものになるためにだけ心をくぼっていくことが出来るということであろう。

身心を害するものは、あくまでもものとして存在するのであって、その存在を否定することは出来ない。みづからが「つよし」ものであるということは、これらのものを除去しようとする必要のない身心の状態を指している。

一般には、身体が大きくて、重く、しかも常に敏捷に活

動することが出来るものほど健康であると考えられて来た。形態と体力にすぐれているものほど「つよし」ものになることが出来ると考えて来たのである。

人類は自然のものの中に「つよし」ものを発見したとはいえ、一口に「つよし」ものといっても具体的にはさまざまである。いかなる「つよし」ものを模範とするべきかが人類の歴史のうちで常に課題となつて来た。勿論、「つよし」ものを手本としたからといって人類が人類であることをやめるわけにはいかない。どのように努力しようとも自然のものにそっくりなりきることは不可能である。

人類は、人類の繁栄のために役に立つものとして生きていかなければならぬ。

人類の繁栄のために人類は独自の生活方法を持たなければならぬ。もし「つよし」ものになつても己の欲望だけを満足するのみならば、弱肉強食の動物の世界と変らぬものになるであろう。

第四に「つよし」要因としてあげられるのは、正しい心を持つていくということであろう。

記紀に、天照大御神の治める地に馳せ上つて来た速須佐之男命は、「僕は邪よこしまき心無し。……」^⑩ただ母の国に行きたいから天照大御神にこのことを訴えようとしたのだとい

い、その証に子を生むことがあげられている。

言葉はみんなのもの、公のものと客観的なものであるのに対して、いまだ言葉にならぬものは、私のもので、主観的なものである。

記紀にいうきたなき心は、公のものと私のものが同じでないことを指していると思われる。

公のものと私のものが同じである、すなわち主客が一致していることは「あかるく」、主客が異っているのは、主観的なものが見えないから「くらし」である。あかるいことはうるわしく、くらしいことは、きたなしである。

正しいというのは、真直な状態を指す。主客が一致している場合は、思考したことは、そのまま行動に移すことが出来るが、主客が異っていれば言葉通りの行動と、心で思っている行動をあわせて行なわなければならない。前者は正しい行動となるが、後者では、遅れたり、つじつまのあわない行動であったりするであろう。

主従の関係を守るか、親子の情愛に生きるか。忠か孝かは、古くから正しい行動を求められた武士達を最も悩ませて来たことであろう。正しい行動は正しい心から現われて来るとはいえ、さまざまな人間関係のうちに生きるものにとつていかに困難なことである。

正しい行動をなすためには、現実のさまざまな人間関係をたち切り、こだわるもののない心の状態でなければならぬ。武士達に、みづからの存在が社会や国家に奉仕するものであるということを自覚するように求めたのは、このためであったと思われる。

「つよく」なるということを、他のものを自己のものに客観的に存在するものを主体化することに求めて来た。それは、「つよし」の言葉の意味、目標を定め意図的に計画したものを行為に実現することに通じるものであろう。

ものをもつことはもたぬよりも「つよい」であらうし、ものになることは、「つよく」なることであろう。そして短かい人生において「つよく」なることは出来るだけ早い方がよいにきまっている。しかし、自己が本当に「つよく」なり得たかどうかは、第三者がものとして決めてくれることなのである。

この意味で、自己は又客観的な存在なのである。

四

近代以前、我が国の歴史のなかでは、ものふと呼ばれた人々のうちに「つよし」の理想的なものを求めて来た。

人間が、身に危険を感じたとき、手にしたものは身を守

するための道具——武器——に変わる。

もののふは、武器をもってたたかう人のことであるが、社会や国家が形成されるようになると、彼らは、社会や国家を武力によって守るといふ役割を与えられ、世襲的に専業とするようになる。

ものふ達は、常に社会や国家の領域の先端において活動することが要求されている。領域の先端にあることは最も危険なところに生きていくことを意味する。しかも彼らが命を惜しんで逃避すれば、社会や国家は滅びてしまうのである。

ものふ達が「つよく」なりたいと願ひ、人々が「つよい」ものふを期待したのは当然であろう。

武功に対する褒美はものふ達を活躍させるのに有効であったが、次第に、恩賞を目当てに活躍するものが現われ、恩賞が与えられると、そのことを権威と考え、荒々しい行動で他の人々を支配するようになると、社会から武器をもつてたたかうものふのあり方が、批判されるようになる。

ものふ達が、望ましい生き方を求めはじめようになつたのは、平安末期頃からのことであろう。今昔物語や宇治拾遺物語には、望ましいものふの例を多くみることが出来る。

ただ笛を吹いていくだけであるのに、袴垂という有名な盗人の頭でさえ、手を出せぬどころか、声をかけられただけで生きた心地がしなかつたという撰津前司保昌の話^⑧。暗やみの中に消えた狐を心眼で射た話や、一同が感心して褒美を与えると「これは神の助けによるもので、私ごとではない」と謙譲するばかりであったという源頼光の話^⑨。盗賊に子供を人質にとられてさわいでいる武士に、子供一人位突殺されるからといって、さわぎたてるのは武士らしくないとなしなめ、盗賊に子供を殺したいのか、自分の命がたすかりたいのかと問ひ、自分の命がたすかりたければ、子供を離すようにといひ、子供を離して盗賊を逃してやつた源頼光の話等は有名である。

ものふがものふになれば、武器が歩んでいるのと同じであろう。せめ入られる隙をなくすためには、心をいつも周囲にくぼけていなければならぬがそのためには、ことあるごとに一つところに精神が集中してしまふようではだめである。「身を思ひ妻子を思へば俸弊かりむ。物恐ぢ不_レ為と云は、身を不_三思は_二妻子を不_レ思を以て云ふ也」このようなものふは又、盗人を改心させるような社会の平安にとつて意味のある存在でなければならぬ。

「身の佗しければ、盗をもし、命や生とて、質をも取に

こそ有れ、悪かるべき事に非ず」

貧しいものにはものを与え、命惜しいものに命を助けてやるのが社会や国家の繁栄を守護するものの役目であるという。

古今著聞集に現われる八幡太郎義家は、源頼信の孫にあたる。彼は当時讚美するものに与える言葉「神に通じたる人」を送られている武者である。彼は、声を聞いただけで「八幡殿」がおわしますと慄えあがるほどの武将であったが、彼が神に通じた人といわれているのは、単なる動物的なつよさの故ではない。

衣川の合戦において、城から逃れ落ちようとする安倍貞任に、「衣のたてはほころびにけり」と呼びかけると、貞任は、「年をへし糸のみだれの苦しさに」と上の句をつけて返したので義家は弓につがえた矢をはずして引き帰したという話は有名である。彼がどの位歌のこころえがあったかは知らない。貞任が命拾いをしたのは、確かに義家と同じように歌の心得があったからかもしれないが、それ以上にたとえ敵将であろうとも同じようにたたかうものの究極の場における苦しい心が義家に理解されたからであろうと考える。義家には、かくされた人間の喜怒哀楽を読みとる力があつた。

一旦弓につがえた矢をはずすこと、まして敵將を逃がしてやることはなかなか出来ることではない。すべてのものを持つ、知る、そして出来る人間を義家に求め、そのわけを万能の神に通じているからだと考えたとしても不思議ではない。神に通じたる人は、永遠に生きることと可能であろう。義家の「つよさ」は、武運の神としていつまでも人々を守護していると信じられている「つよさ」なのである。

武士道は、もののふ達が自ら求めたもののふのあり方と、そこに示された具体的な行為を武士の規範とし、かく為さなければならぬと強制されていったものである。

我が国において「つよく」なりたいと願ったもののふ達の「つよさ」は、武士道においては形式的なものとなつていったと考えられる。

体育は、その発生から考えて人間が「つよく」なることに貢献するものでなければならぬ。

つよいものは、自己の意図的な行為によって発見される客体である。

「つよくなる」は、行為によってみづからの「よわし」を発見し、自覚し、客体の「つよし」を我がものにするために行為することであり、常に「よわし」自己を「つよ

し」自己に変身させていくことである。
それは、自己が人間として存在していることを意味あらしめるために、生涯を通して、いとなまれつづけなければならぬものである。

註

- ① 「つよい」は「つよし」の口語。
- ② 大槻文彦著「大言海」四三四頁。
- ③ 宇宙の万物を動かす目に見えない力に左右されているという程の意味。
- ④ 本名イリヤ・ヤコブレビツチマルンシャーク(一八九五～一九五三)「人間の歴史」は代表作。
- ⑤ 「人間の歴史」M・イリン著、八住利雄訳。第一章～第四章。
- ⑥ 日本古典文学大系 古事記 五五～六一頁。日本書記上八〇～九〇頁。
- ⑦ 岩波文庫「ギリシヤローマ神話」野上弥生子訳 第二章プロメニウスとバンドウ。
- ⑧ 「稽古考」―すぐれるということについて、日本体育学会第22回大会号。
- ⑨ 保元物語では、為朝の最後は自殺になっているが、一説にはそれは身代り、八丈島に逃れ琉球にわたったと伝えられている。又伊豆大島にも為朝の伝説がある。「日本史探訪」四六頁。
- ⑩ 日本古典文学大系「古事記」七五頁。「日本書記」上一〇四頁には、「黒くろぎ心こころと」ある。

- ⑪ 古事記は字氣比とあり、日本書紀では誓約とある。いずれもかくあるべきことを行為によって生起させることを指す。
- ⑫ 日本古典文学大系「宇拾遺物語」一〇六頁。
- ⑬ 日本古典文学大系「今昔物語」四第二十五卷、三八二頁。
- ⑭ 日本古典文学大系「今昔物語」四第二十五卷、三九〇頁。
- ⑮ 日本古典文学大系「古今著聞集」二七四頁。
- ⑯ 日本古典文学大系「古今著聞集」二七二～二七三頁。
- ⑰ 日本古典文学大系「古今著聞集」二七四頁。

参考文献

- 今村嘉雄著 日本体育史
- 今村嘉雄著 世界体育史
- 浅井 浅一他著 体育の哲学
- 久保忠利訳 思考と行動における言語
- 西村真次著 技術進化史
- 今村嘉雄著 スポーツの民族学
- 堀 喜 望 著 文化人類学
- 後 藤 淑 著 日本芸能史入門
- 山崎正和解説 世阿弥
- 奈良本辰也著 武士道の系譜
- 勝部真長著 日本思想の構造
- 岩波講座哲学 日本史の哲学
- 石田一良著 日本文化史概論
- 高橋俊乗著 日本教育史

(本学専任講師、体育)